バカと彼女と召喚獣

オーランチキチキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと彼女と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ３７１４Ｚ

【作者名】
オーランチキチキ

【あらすじ】
「いやだ！テストなんか受けたくない！！」
天才兼バカの水樹夏目は叫んだ。
あるトラウマからテストを受けたがらない彼女はＦクラスの面々と過ごしてゆくことで、少しずつ成長していくのだった。

予習問題

いつからだろうか、テストが嫌いになったのは・・・

いつからだろうか、まともに授業を受けなくなったのは・・・

私は他人(ひと)より頭が異常に良かった。だから年齢に似合わない点数を叩き出したり、問題を軽々と解いていた。

ただそれだけだったのに・・・

いつの間にか私は私を妬んだ奴だけになって、壮絶ないじめに遭っていた。

「カンニング犯」

「卑怯者」

「不良」

そんな称号が勝手に私に付きまとい、子供だけではなく大人達にもそんな風に見られていた。

私の実力なのに・・・

だから私はテストを受けるのをやめた。授業を受けるのをやめた。

第1問

私が高校に入って2度目の春。
今年の春は暖かく、春一番が見事に咲かした桜の花を舞い散らす。
そんな気持ちのいい朝に私は・・・

「遅刻だ、水樹」

暑苦しく気持ち悪い西村先生（通称：鉄人）に会っていた。

「お、おはようございます鉄・・西村先生」
「おはようではないだろう、それよりお前は言うべきことがないのか？」

はて、挨拶以外に鉄人に言うべきこと・・・。ああ、あれか！

「今日も暑苦しいですネ、鉄人」

私の頭部に拳骨が降った。

「お前は遅刻の謝罪より教師の罵倒なのか！それと西村先生だ」
「いったぁ！か弱い乙女に何するんですか！？」

この暴力教師め！女の子に手を出すなんて・・・

「お前は例外だ。全く、去年から吉井と坂本と3人でどれほど悪事をこなして来たと思ってるんだ？」

さーて、私は去年何をしたかなぁ・・・。とりあえず尋常じゃない

数の騒動&事件を起こしてきたきがするなぁ。

「大体お前に女性だという認識があるならまず服装から直して来い」
「これはスカートがどうしても嫌だから学園長に頼み込んで着させてもらってるんです！」

どういう訳か私は幼少期からスカートという物がどうしても好きになれず、生まれてこの方（例外を除いて）ズボン類で暮らしている。

「はぁ、まったく・・・。まぁいい、これはお前へのプレゼントだ」
鉄人は大きくため息を吐いて、持っていた箱から二つの封筒を取り出す。

「えーと、クラス振り分けテストの結果と・・・もうひとつは何ですか？」
「いいから開けてみろ」

半信半疑（というより無信全疑だが）で封筒を受け取る。封筒には両方とも『水樹夏目』と私の名前が書いてある。

「こっちはクラス分けか、結果は・・・まぁFか」

こっちは大体予想できていた。だってテスト受けてない（つまり0点）からね。
そしてもうひとつの方は・・・

『水樹夏目
以上の者を観察処分者とする』

「なんで!?なんで私が明久と同等の扱い!?」

いくらなんでも重過ぎる処罰だと思う。てか何の処罰だこれ?

「今回のクラス振り分け試験の結果から今朝の職員会議で満場一致で可決された。テストを受けないんだから当然だ」

そんなぁ・・・

「それとだ、学園長がお前のことを呼んでたぞ、至急だそうだ」

その上クソババァからの呼び出しか・・・。どうやら私は今年ツイてないらしい。

こうして私の(初っ端から)最悪の学園生活が始まった。

第2問

「失礼しまーす」

返事が返ってくる前に学園長室のドアを開ける。

「普通は返事が返ってきてから開けるもんだがね」

解ってますよ、ワザとです。

さて、職員室には呼び出しの常連の私だけど学園長室には数回しか来たことがない。何を言われるのか・・・

「アンタのことなんだがね、どうしてもテストを受けないつもりかい？」

もしや退学の危機が迫ってるのだろうか？

「アンタがこのままテストを受けないままだったら退学ってのも十分にあるさね。しかしアンタはここの学園にトップで入学した生徒だからねぇ、できれば退学なんてしてもらいたくないんだよ」

そう、私はここの入試の時に本気を出して見事トップで入学している。つまりやればデキる子なのだ。

「・・・考えておきます」

「そうしておくれ、アンタからはいいデータがとれそうだからねぇ」

データ？何のことだろう？

「話はそれだけさ、とっととＨＲに行っちまいな」

自分から読んでおいてなんて扱いだ。そう思ったが口には出さず、
一応作り笑顔で退室する。
テスト受けなかったら　退学かぁ・・・

「とんでもない事になったな・・・」

そう呟いて私は教室に向かうのだった

☆

ここ文月学園にはクラスがＡ～Ｆまで６クラスある。
Ａから順に成績がいい者が収まり、それに伴ってクラス設備も高級
な物になっている。
さっき通りかかったＡクラスはホテル並みの豪華さを誇っていたが、
我がＦクラスとなると・・・

「なんだこの汚さは・・・」

もはや廃屋と言うべき設備だった。
壁はヒビと落書きだらけで逆にそれらが無い所を探すのが苦労する
具合で、窓ガラスは割れている。

「しょうがない、慣れていくか」

自分に言い聞かせるように呟き、教室に入ると・・・

「「ダァーーリィーーン！！」」

何故かクラス全員（一部除く）が合唱していた。
え？これは何ですか？
状況に私が追いつけないでいると、席（といっても卓袱台だが）で立っていた気分悪そうな男子生徒が

「――失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

と言って着席する。
えーと、これは自己紹介の途中なのかな？
すると呆然とする私に聞き覚えがある大人しいオッサンの声が呼びかけてくる。

「えーと、水樹さんですね。自己紹介の途中なのであなたもお願いします」

去年国語の授業でお世話になった福原先生だ。去年は鉄人だったが、今年の担任は福原先生か。

「あ、はい。水樹夏目です。よく近藤アリカさんと間違えられますが別人です。よろしくお願いします」

とりあえず無難に自己紹介を済ませてしまう。ちなみに近藤アリカとは巷で人気の声優アイドルで、ぶっちゃけ私だ。ただ面倒なことが起きては欲しくないので、その事は隠している。
とりあえずこの場の空気的に空いている席に落ち着こう。えーと・・・とりあえず後ろの席が空いてるからそこに座ろう。
どうやらこのクラスは私の顔見知りが集まっているようで、吉井明久・坂本雄二・島田美波・木下秀吉・土屋康太・須川君（下の名前覚えてない）ｅｔｃ・・・と懐かしい面子がそろっていた。

「よう夏目、お前もこのクラスか」
「テスト受けなかったからね」
席に座ると早速声が掛かる。
喧嘩慣れした身体にツンツンの髪の毛、坂本雄二か。
「それにしても野郎ばっかのクラスだね」
「しょうがないよ、Ｆクラスだから」
今度は学園一のバカの吉井明久が話しかけてくる。まぁ、私もその称号を貰ってしまったのだが・・・
「ま、今年もよろしく」
淡々と意進む自己紹介の作業の中、３人でお互いクラスが一緒だったのを若干ながら安心しているといきなり教室の扉が開いてとある女子生徒が入ってくる。
「あの、遅れて、すいま、せん・・・」
『え？』
どこと無く教室中からそんな声が聞こえた気がする。
まぁ、驚くのも仕方ないか。だって・・・
「あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」
このクラスに似つかわしくない綺麗で賢い女子生徒がそこにいた。
ここ、笑う所？
そう皆が驚いた声を出したのは他でもない。姫路さんは成績が良く、Ｆクラスに居るべき人材ではないからだ。

これは今年は本当に面白くなるかもしれない・・・

第3問

「はいっ！質問です！」

彼女が自己紹介を終えた直後、男子生徒が高らかに挙手して質問する。

たぶん他の奴らも挙手しないだけで、同じ疑問を抱いているだろう。

「なんでここにいるんですか？」

場合によってはものすごく失礼に聞こえる質問だ。しかし、これが（私含めて）クラス全員の疑問なのだ。

しかし姫路さんはそんな質問に怒りはせず、むしろ緊張した面持ちで質問に答えてくれた。

「そ、その・・・。振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいまして・・・」

なるほど！と言った具合にクラスの奴らは頷く。本当に分かってるのか？

文月学園はテストに関しては寛大な心を持ち合わせていないらしく、私のような受けたくない奴も姫路さんのような受けられなかった人も平等に0点扱いにする。そう思うと姫路さんは可哀相だなと思えてくる。

しかしFクラスの野郎共は姫路さんの言い分を聞いて・・・

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』

と、言い訳を言い出した。想像以上のバカばっかりだ。

「で、ではっ！一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように姫路さんは明久と坂本の間の席に着く。
因みに私は明久の隣（姫路さんの反対側）だ。

「き、緊張しましたぁー・・・」

よほど緊張したのか、姫路さんは卓袱台に突っ伏してしまった。明久、話しかけるなら今だよ？

「あのさ、姫ーー」
「姫路」

明久撃沈。
ワザとだろうか、明久の声にかぶるように坂本が姫路さんに声をかける。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」
「あ、姫路です。よろしくお願いします」

深々と頭を下げる彼女。この丁寧さや育ちの良さは昔からかわらないなぁ。よし、私も！

「あのさ、姫ーー」

「姫路さん！お久しぶり！！」

明久が血涙を流しながらこっちを見ているが気にしない。

「あ！夏目ちゃん！お久しぶりです」

「なんだ、知り合いだったのか？」

雄二が意外そうに質問してくる。

「うん、小学生ころだったかな？同じ塾にかよっててさ・・・」

ヤバい、魔の弁当を思い出した。

ここは話題を変えてこれ以上思い出さないようにしよう。

「そ、そう言えば姫路さん体調はもうだいじょうぶなの？」

「あ、それは僕も気になる」

このタイミングで明久が口を挟んでくる。そして明久の顔を確認した姫路さんは

「い、吉井くん！？」

驚いていた。

さては明久の顔があまりにも酷いから驚いてしまったな？

「姫路。明久がブサイクですまん」

「ほら明久、驚かしたんだから誤りなよ」

悪いことをしたら謝る、これ基本だよね。

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」
「まぁ、見てくれは悪くないような気がしない事も無いね」
「ああ、俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」
「え？それは誰ーーー」
「そ、それって誰ですか！？」

この雄二の発言に食いついたのは意外にも姫路さんだった。さっきの擁護（？）と言い、この食いつきと言い、もしかして姫路さんは明久の事が好きなんだろうか？

「確か、久保ーーー」

久保？女性で久保っていたっけ？

「ーーー利光だったかな」

久保利光　↓　♂

「・・・・・・」
「明久、声を殺して泣くな」

一応フォロー（？）を出しておこう。成っているかどうかは知らないけど。

「半分冗談だ。安心しろ」
「え？残り半分は？」

あれ？冗談だったの？久保君が同性愛者なのは知っていたけど・・・

「ところで姫路。身体は大丈夫なのか？」
「あ、はい。すっかり平気です」
「ねぇ雄二！残りの半分は！？」
「明久ウルサイ！！」

明久が騒ぐのでとりあえずわき腹にエルボをかましておく。

「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」

ち、明久のせいで先生に警告されたじゃないか。って、先生がパンパンと教卓を叩いたら教卓が粗大ゴミになったぞ！どんだけ設備悪いんだこのクラスは！？

「え～・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

先生は気まずそうにそう言うと足早に教室から出て行った。

第4問

「雄二、夏目、ちょっといい？」

明久にそう言われて廊下に出た3人、どうやら話しにくい内容みたいだ。

「それで、話って？」

「この教室についてなんだけど・・・」

なるほど、『酷い』以外言いようが無いこのクラスか。

「Fクラスか、想像以上に酷いもんだな」

「夏目もそう思うよね？」

「そうだね、もはや廃屋だからね」

腐った畳に足の折れた卓袱台。これで勉強しろと言うのだから無茶苦茶極まりない。

「Aクラスの設備見た？」

「ああ。凄かったな。あんな教室他に見たことが無い」

「あれは教室なの？」

一方は廃屋、もう一方はホテル。これで不満を持たない奴はいないと思う。

「そこで僕からの提案。せっかく二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争？」

「うん。しかもAクラス相手に」

さて、明久は何が目的か・・・。たぶん明久のことだ、姫路さんの為に設備をAクラス並にしてあげたいと思ったのだろう。

「はぁ、姫路さんの為・・・だよね？」

私がそう言うと明久がビクッっと背筋を伸ばす。分かりやすい奴。

「本当にお前は単純だな」

「バカ」

明久の真意に気付いた以上私と坂本の目には警戒の色が消えうせ、代わりに楽しげな笑みが浮かんでいた。

「いいよ！私は協力するよ」

「え？いいの！？」

まぁ、こっちも色々と事情があるし。どうせテスト受けないと駄目なら試召戦争の為にした方がいいと思う。

「ま、俺も試召戦争をやろうと思っていたとこだしな」

「雄二が？なんで？」

「世の中学力だけがすべてじゃないって、そんな証明をしてみたくてな」

雄二のその言葉には何故か重みを感じた。昔何かあったのだろうか？

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし――おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「はいはい」
「あ、うん」

☆

「それでは自己紹介の続きをお願いします」
壊れた教卓をボロの教卓に替えて、再び自己紹介の作業が再開される。

「えー、須川亮です。趣味は――」
あ、須川君の下の名前って亮だったんだ。どうでもいい情報が手に入った。
そして自己紹介は坂本以外が終わって・・・

「坂本君、君が最後の一人ですよ」
「了解」

先生に呼ばれて坂本がゆっくり立ち上がる。少しもおどけていない、どこかクラス代表の貫禄を身に纏ったような気がするように思えてしまう。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」
Fクラス代表・・・と言ったら聞こえは良いが、実態は下の上。つまり下だ。

「さて、皆に聞きたい」

坂本が教室を見渡す。

カビ臭い教室
古く汚れた座布団
薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・・・・不満は無いか？」
『大ありじゃぁっ！！』

二年F組生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

嘘付け、代表としてなんかこれっぽちとも思ってないくせに。とはいえ、さすが坂本だ。不満を煽ってクラスを試召戦争へと導く、カリスマ性とある程度回る頭が無いとできない技だ。

「そしてこれは代表としての提案だが・・・Fクラスは Aクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第5問

『勝てるわけがない』
『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』
『姫路さんと夏目さんがいたら何もいらない』

そんな悲鳴と最後の台詞で逆上した島田さんに首を極められてた私の悲鳴が教室に響く。
確かにFクラスとAクラスの戦力差は火を見るより明らかだ。しかし歴史の戦争でも策次第では戦力差など簡単に覆すことができる。

「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

そう宣言するからには坂本にも何かしらの策があるのだろう。

『何を馬鹿なことを』
『できるわけないだろう』
『何の根拠があってそんなことを』

否定的な意見が教室に再び響く。

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

そう言って代表は壇上から皆を見下す。

「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」
「・・・・・・・!!（ブンブン）」

「は、はわっ！」

康太と呼ばれた彼は頬に付いた畳の跡を隠しながら壇上へと上がる。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」

土屋康太の名前を知る奴は殆どいない。が、ムッツリーニという名前を知らない奴も殆どいない。その名は男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以って挙げられる。

『ムッツリーニだと・・・？』

『馬鹿な、奴がそうだというのか・・・？』

『だが見ろ。あそこもで明らかな覗きの証拠を未だ隠そうとしているぞ・・・』

『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ・・・』

そして話題は次に。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力は良く知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

確かにAクラス並の実力を持つ彼女が味方ならこの上なく頼もしい。

「木下秀吉だっている」

彼は学力ではあまり名前を聞かないが、演劇部のホープとか双子の姉の事で耳にすることがある。その実態は稀な美少年（美少女？）で、女性の私でも分からなくなるほど綺麗だ。

「そして水樹夏目、こいつは今までテストをボイコットしてきたが・・・実は化け物だ」

なんて説明だ、もっとまともな説明の方法は無かったのか？

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『実力はAクラスレベルが二人、化け物が1匹いるってことだよな！』

化け物呼ばわりやめろ。

しかし、クラスの士気は確実に上がっている。いけそうだ、やれそうだ、そんな雰囲気が教室中に満ちている。

「それに吉井明久だっている」

・・・シン――

あれ？一気に士気下がっちゃったよ？

なるほど、明久はオチ扱いか。

「ちょと雄二！なんでそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要ないよね！」

『誰だよ吉井明久って』

『聞いたこと無いぞ』

「そうか、知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

グサリ、と何故か私の胸に言葉が刺さる。

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

どうしよう、さっきから明久と坂本のやり取りが何故か痛くて痛くて・・・言葉が背中と胸に刺さるんだ・・・

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんが小首を傾げている。たしかに姫路さんには無縁の言葉だからなぁ・・・

私も今日成り立てだからあまり知らないけど。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

その代わり痛み・疲労・ｅｔｃがフィードバックされるらしいが・・・

「まぁ、うちのクラスにはもう一人《観察処分者》がいるけどな。なぁ夏目」

名指しで呼ばれた・・・。くそ、早いところ奴を処分しておくべきだった・・・

「だがあいつは明久を違って本気を出せば凄い点を取ってくる。そ

れは俺が保障する」
『てことは召喚できない奴が1人と、人を殴れる召喚獣を持つのが1匹いるってことになるよな』
「気にするな。明久はどうせいてもいなくても同じような雑魚だ」
散々な扱いだな、明久。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆、この境遇には大いに不満だろう？」
『当然だ！！』
「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」
『おおーー！！』
「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」
『うおおーーっ！！』

皆が盛り上がって我先に出陣の準備に取り掛かる。
私も準備しようとした時、不意に声が掛かる

「夏目よ、お主はテストを受けても大丈夫なのか？」

独特の示威言葉、秀吉だ。

「少し抵抗あるけど明久の力になってあげたくてね。別に好きだからじゃないよ！でもあんなバカ見てたらどうしても協力してあげたくて・・・ね」
「全く、お主もバカじゃのう」
「ほめ言葉として受け取っとくよ、ありがと。じゃぁ私は鉄人呼んでくるよ」

またカンニングを疑われないように、鉄人の監視を付けておけば疑われなくはなるだろう。

「やるかっ！」

明久が坂本に騙されて使者という大役を果たしに行くのを他所に私は決意を固めるのだった。

第6問

「騙されたぁっ！」

明久がものすごい勢いで教室に転がり込んでくる。
良く見ると制服は破かれ、明久には紅葉のマークや引っかいた跡が残っている。

「やはりそうきたか」
「これくらいは予想内だね」

だいたい使者はリンチを喰らうのがセオリーだ。明久はそんなのも知らないのか。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！ていうか夏目も知ってたんなら雄二を止めてよ！」
「だって明久以外で試召戦争に参加できなくなってもいい奴なんてこのクラスにはいないし・・・ねぇ？」
「まぁな。これくらい予想できないで代表が務まるか。騙されるお前が悪い」
「少しは悪びれろよ！」

あんなこと言うが実際に試召戦争で一番役に立たないのはやはり明久だ。だからこういった仕打ちは許容範囲内だと思う。

「よし、今からミーティングを行うぞ」
「明久行くよ」

何故か床で転げまわっていた明久を蹴飛ばして坂本に続く。どうや

ら屋上でするみたいだ。

☆

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

よかった、ちゃんと使命を果たしてきたんだ。

「もし伝えてこなかったらもう一度Ｄクラスに放り込むところだったよ」

「夏目、君は僕の命を何だと思ってるの？」

ゴミ

「まぁいい。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

「そう思うならパンでも奢ってくれると嬉しいんだけど」

そういえば明久の食生活は大分おかしいんだった。

「えっ！吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

そして何も知らないこの人は純粋に明久のことを勘違いしてしまう。

「いや。一応食べてるよ」

「・・・あれは食べてるといえるのか？」

「何が言いたいのさ」

だって、あれは・・・

「お前の主食って・・・水と塩だろ？」
「あと油と砂糖だっけ？」
「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ・・・」
「なめる、が表現としては正しいじゃろな」

みんなの目が妙にやさしくなる。
私も明久の食生活を知ったときは驚きを通り越して笑ってしまった。
今では時々差し入れ（同じマンションの隣の部屋なので）をしているが、それ以外は舐めているようだ。

「・・・あの、良かったら私がお弁当を作ってきましょうか？」
「「ゑ？」」

明久は突然のやさしい言葉に耳を疑った。私は突然の死刑宣告に耳を疑った。
ちなみに私は姫路さんと同じ塾に通っていた頃、弁当を作ってもらったことがある。どういう訳か彼女が作った料理は殺人料理化するようで、当時の私に相当な傷跡を残していった。
当時は夏真っ盛りだったので食中毒ということになっているが、あれは違う！あれは姫路さんの実力の結果だ。
そんな中、さらに追い討ちを掛ける言葉が飛んでくる。

「あ、いえ！皆さんにも・・・」

ヤメロ・・・！私は死にたくない！
幸い私以外はまだ誰も知らないようなので、私は腹痛でも訴えて食べない方向で行こう。
残念ながらその後の会話は頭に入らず、正直言って覚えていない。
が、私は大事な案件を抱えたままDクラス戦に臨むことになったの

だった。

第7問

いよいよ試召戦争が始まった。
教室の外ではDクラスとFクラスの面々が戦っているようで、さっきから騒がしくなっている。
そんな中、私はというと・・・

「そこまで！水樹、お前は才能はあるんだな」

鉄人監督の下、点数の補充を終えていた。
全教科とはいかなかったが、英語・化学・数学の3教科を何とか間に合わすことができた。
それぞれ３００点越えはいっただろう。
とりあえず鉄人が採点している間に出撃の用意ぐらいはしておこう。

「坂本！採点出来次第出るよ！」
「ああ、できるだけ早めに行ってやってくれ」

上履きを履きつつ教室の奥で戦況を確認しながら踏ん反り返っている坂本に一応報告しておく。
よし、私はいつでも出れる。後は・・・

「水樹、採点が終わったぞ。じゃぁ補習室で待っているからな」
「私死ぬ前提かよ！？」

鉄人が採点を終えて私にテストを返す。結果は・・・

英語・・・３２４点
化学・・・４３２点

数学・・・４０１点

よし、十分すぎる出来だ。

「よっし！水樹、出ます！！」

勢い良く教室のドアを開けて廊下を疾走する。
ギリギリ戦線を維持できているが、それも少し押されたら一気に崩壊するだろう。早く合流しないと・・・

「よ、吉井！このゲス野郎！」

渡り廊下に差し掛かる頃、そんな罵倒が聞こえてきた。この声は島田さんだ。
そしてもう一つ

「お姉さま！逃がしません！」

甲高い声、清水の声だ。彼女は学校でも有名なユリっ娘の上スレンダーな体系が好みらしく、よく島田さんや私が求愛の的にされる。
正直言って苦手だ。
ここは見なかったことにして・・・

「ああ！夏目お姉さままでっ！やはり美春とお姉さま達は運命の・・・」

「結ばれてない！むしろ断ち切ってやる！！」

くそっ！見つかってしまった・・・、こうなったらさっさと始末してしまおう。
お互いそれを悟って戦闘態勢に入る。

「美春はしっていますからね！夏目お姉さまはテストを受けていない事ぐらいは！！ここは大人しく降参なさった方が・・・」
「悪いね、今回からはガチでテスト受けてるんだ、手加減は出来ないからね！！」
「「試獣召喚！！」」

２人同時にそう叫ぶと、お互いの足元に幾何学模様の魔方陣が浮かび上がる。そして自分の中から何かが抽出される感覚の後、自分をデフォルメしたような小さな召喚獣が姿を現す。
清水のは西洋の甲冑を身に着けていて刀を持っていて、それに対する私はアンドロイドやキャストといったＳＦに出てきそうなユニットを体中に装着した近未来の装備で出てきた。ちなみに手には何も持っていなくて、その代わりに召喚獣の周りに２つの白いレールガンのような物が浮いている。ビットやファンネルみたいな物だろうか？

「それではっ！行きます！！」
「このっ！」

刀で突いてくるのをスレスレで交わして、間合いを取る。それでもって攻撃！今はまだこういった単純な操作しか出来ないが、そのうち慣れてもっとテクニカルに動けると思う。
浮いていたレールガン（のような物）が清水の召喚獣のほうに向くと、今度はその電極の間から高速で弾丸が発射された。間違いない、これはレールガンだ。

「そんな！さすがお姉さま・・・」

参考に両召喚獣の頭に点数が表示されて清水が驚嘆の声を上げる。

『Ｄクラス　清水美春　化学　２４点　ＶＳ　Ｆクラス　水樹夏目　化学　４２１点』

攻撃したから補正が入った点数が表示される。初めての攻撃だったから急所をはずしたみたいだ、半分ほどしか削れていない。

「今度こそ、止め！」

「きゃぁっ！」

今度こそレールガンの十字砲火（クロスファイア）で戦死にと追いやる。

これで当分は追っかけまわされずに済む。

「島田さん！大丈夫？」

「なんとか・・。それより夏目、吉井知らない？」

その明久は私を盾にして丁度隠れる位置で指示している。

この場合私はそっと移動するのがいいだろう。明久、しばらく修羅場を楽しみたまえ。

しばらくすると「殺してやるんだからぁーっ！」という雄たけび（？）が戦場に木霊した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3714z/

バカと彼女と召喚獣

2011年12月14日00時48分発行